

# アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(9) —デビューに関する記事より—

A study of Adolfo Sarcoli's Music Activities(9)  
—Focusing on Documents Relating to Sarcoli's Debut—

直江 学 美 (人間科学部こども学科教授)  
Manami NAOE (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

## 〈要旨〉

イタリア人テノール歌手のアドルフォ・サルコリ(1867-1936)は、1911(明治44)年秋に来日した。来日は偶然のことであったが、そのまま日本に居を構え、三浦環(1884-1946)、関屋敏子(1903-1941)、原信子(1893-1979)ら世界で活躍する声楽家を育てた。

偶然来日したサルコリがどれほどのオペラ経験を積んでいたのか、どれほどの歌唱力が備わっていたのか、どのようなレパートリーを持つテノール歌手であったのかなど、サルコリのオペラ歌手としての力量やキャリアについての調査はまだ充分ではない。本研究では、これまであきらかにならなかったサルコリのオペラデビューに関する記事を調査対象とし、サルコリのオペラ歌手としての力量を考察した。

サルコリは1897年にシエナの劇場で上演された歌劇《ラ・ジョコンダ》のエンツォ役でオペラデビューを果たし、そのすぐ後にも歌劇《アイダ》のラダメス役を10回以上演じたことがわかった。また、当時の記事の調査からは、サルコリがシエナ市民から非常に高い評価を得ていたことを示した。本研究では、デビューに関する記事の調査により、サルコリは、オペラのシーズンを通して主役級の役を歌いきる力を持つ、生まれ故郷のシエナ市民から、将来を期待されたテノール歌手であることをあきらかにした。

## 〈キーワード〉

アドルフォ・サルコリ, 西洋音楽受容, イタリアオペラ

## 1 はじめに

イタリア人テノール歌手のアドルフォ・サルコリ(1867-1936)は、1911(明治44)年秋に来日した。来日は偶然のことであったが、サルコリはそのまま日本にとどまる事を決め、東京の四谷仲町に居を構える。サルコリは、その小さな自宅で声楽の教授活動をおこない、三浦環(1884-1946)、関屋敏子(1903-1941)、原信子(1893-1979)ら世界で活躍する声楽家を育てた。また、演奏会にも積極的に出演した当時、サルコリの知名度はかなり高かったことがわかっている。弟子たちも「シエナ会」という会を結成し、サルコリおよびサルコリ門下は西洋音楽黎明期に「イタリア系」として多くの音楽活動をおこなった。

筆者はこれまで、サルコリが日本でおこなった音楽活動を、『金沢星稜大学人間科学研究』に「アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究」(1)-(8)としてまとめ、報

告した。また、来日以前のイタリアでの演奏活動に関しては、インターネット上の情報やいくつかの新聞記事、そして、日本で発行されたパンフレットの情報を調査し、『金沢星稜大学人間科学研究』の「アドルフォ・サルコリの演奏活動について—海外を中心に—」に概観した。

しかし、サルコリがどのような力量を持つ歌手であったのか、どのようなオペラレパートリーを持って来日したのかについての調査は、まだ充分とはいえない。また、サルコリは多くのオペラレパートリーを持った歌手であったことは伝聞として日本で語られていたが、当時、オペラを全幕上演する力を持ち合わせていなかった日本において、サルコリがオペラを全幕歌った記録は無く、オペラのアリアをコンサートで歌うにとどまっている。

本研究では、サルコリの音楽活動のうち、イタリアでのオペラデビューについて報告する。筆者がこれまでに調査

したサルコリのデビューに関連する新聞記事の中から、サルコリに言及している箇所日本語訳を紹介し、考察をおこなう。

なお、引用文のイタリア語表記は当時の記載通りとし、( )は筆者の補筆とする。日本語訳は、2012年3月にミラノでおこなった現地調査に協力していただいて以来、折に触れご助力頂いている土井聖子氏の訳である。

## 2 サルコリのデビュー

### 2-1 歌劇《ラ・ジョコンダ》

サルコリのオペラデビューは30歳の時であった。1897年12月23日(木)、イタリアのシエナにあるリンノヴァーティ劇場(Teatro dei Rinnovati)で上演された、ポンキエツリ(Amilcare Ponchielli: 1834-1886)作曲、歌劇《ラ・ジョコンダ》のエンツォ役である。

デビューの様子が12月26日付のGazzetta Musicale di Milano(ガゼッタ・ムジカレ・ディ・ミラノ)“La Gioconda di Ponchielli ai Rinnovati(「リンノヴァーティ劇場におけるポンキエツリの《ラ・ジョコンダ》)」に掲載されている<sup>(1)</sup>。

《ラ・ジョコンダ》は、リンノヴァーティ劇場のオペラシーズンの幕開け演目で、年をまたいだ1月上旬まで上演されていたようである。

Il nostro concittadino, Adolfo Sarcoli, tenore (allievo del maestro Giorgio Sulli), sul quale era concentrata la generale curiosità, anche perché debuttava in una parte di rara e vera importanza, vines una grande battaglia. Egli ha rivelato una voce tenorile delle più gradevoli, argentina, limpida specialmente negli acuti, unita a molta disposizione per il canto e ad un modo di fraseggiare chiaro e corretto; ha dato prova pure di attitudine scenica non comune in un esordiente. Nella romanza, detta da lui benissimo e replicata, ha suscitato vivo entusiasmo<sup>(1)</sup>. “Gazzetta Musicale di Milano, 1897.12.26, p.u”

「(マエストロ・ジョルジョ・スッリの教え子である) テノールの、我らがシエナ市民アドルフォ・サルコリは、彼が珍しい、本当に重要な役柄でのデビューになったことから観客の関心の的となっていたが、その大舞台を見事に成功させた。彼は最も素晴らしい美声の持ち主の一人で、その声は、玉を転がすような、特に高音部の非常に澄んだテノールであり、それが彼のオペラ歌手としての素質や明確で正確なフレージングと一緒に、また新人にはたぐいまれなほどの演技力も証明された。彼がすばらしく朗唱し、復唱したロマンツァは、熱狂的な感興を呼び起こした<sup>(1)</sup>」

サルコリのデビュー公演が大好評であったことを示すこの記事は、デビューを果たした「我らがシエナ市民」新人サルコリに対する、持ち上げた内容であったことは否めないが、それでも、サルコリはオペラの大役を、シーズンを通して歌い切ることができる歌い手であったことがわかる。また、指揮者は恩師のジョルジョ・スッリ(Giorgio Sulli)であり、サルコリは、恩師のもと、生まれ故郷のシエナでオペラデビューを果たした。ガゼッタ・ムジカレ・ディ・ミラノには、このシーズン初日のレビューの他、1898年1月3日付の『“TEATRI (劇場)” Ai Rinnovati (リンノヴァーティ)』に「テノールのサルコリは一夜ごとに素人の域を脱し、アーティストの域に入ろうとしている。実にそうなのである!彼の声の音域の広さと澄み具合は日に日に増していつているようであり、演技にもほとんど欠点がなくなってきた。サルコリはその才能や素質を披露しており、近いうちに本当に文字通りのアーティストになりそうだ<sup>(2)</sup>」との批評が掲載された。“Gazzetta di Siena periodico settimanale, 1898.1.3, p.3”

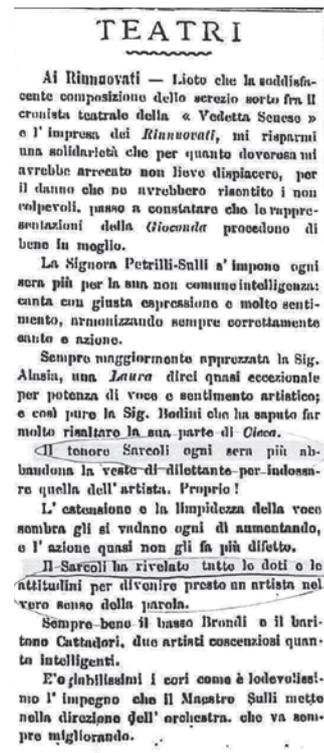


写真1 “TEATRI” ‘Ai Rinnovati<sup>(2)</sup>’,  
Gazzetta di Siena periodico settimanale, 1898.1.3, p.3

オペラ《ラ・ジョコンダ》に出演した演奏家のうち、名前が確認できたのは Petrilli Sulli (ソプラノ：ジョコンダ)、Alasia (メゾ・ソプラノ：ラウラ)、Bodini (アルト：チェーカ)、Brondi (バス：アルヴィーゼ)、Cattadori (バリトン：バルナバ)、Giorgio Sulli (指揮)であった。(括弧内には確認できた声種および役名を筆者が加えた。)

## 2-2 歌劇《アイダ》

リンノヴァーティ劇場のオペラシーズンの演目は、歌劇《ラ・ジョコンダ》が終わったすぐ後の1月20日から、ヴェルディ (Giuseppe Verdi: 1813-1901) 作曲、歌劇《アイダ》が始まる。《ラ・ジョコンダ》でデビューしたばかりのサルコリは、引き続き《アイダ》にラダメス役で出演している。指揮者は、《ラ・ジョコンダ》と同じ、師匠のジョルジョ・スッリであった。

歌劇《アイダ》に関する記事のうち、サルコリの名前がみられたものを表1にまとめる。

	掲載紙名/所蔵先	掲載日/面	タイトル
①	LA VEDETTA SENESE <sup>(3)</sup> (ラ・ヴェデッタ・セネーゼ) ミラノ音楽院図書館	1月19日 2面	TEATRI(劇場)
②	LA VEDETTA SENESE <sup>(4)</sup> (ラ・ヴェデッタ・セネーゼ) ミラノ音楽院図書館	1月21日 2面	TEATRI(劇場)
③	Gazzetta di Siena periodico settimanale <sup>(5)</sup> (ガッゼッタ・ディ・シエナ週刊刊行) Biblioteca Comunale degli Intronati di Siena (シエナ図書館)	1月23日 2面	TEATRI(劇場)
④	Gazzetta Musicale di Milano <sup>(6)</sup> (ガッゼッタ・ムジカーレ・ディ・ミラノ) ミラノ音楽院図書館	1月24日 不明	Aida di Verdi (ヴェルディのアイダ)
⑤	Gazzetta di Siena <sup>(7)</sup> (ガッゼッタ・ディ・シエナ) Biblioteca Comunale degli Intronati di Siena (シエナ図書館)	1月30日 2面	TEATRI(劇場)
⑥	Gazzetta di Siena <sup>(8)</sup> (ガッゼッタ・ディ・シエナ) Biblioteca Comunale degli Intronati di Siena (シエナ図書館)	2月6日 2面	TEATRI(劇場)
⑦	Gazzetta Musicale di Milano <sup>(9)</sup> (ガッゼッタ・ムジカーレ・ディ・ミラノ) ミラノ音楽院図書館	2月12日 不明	SIENA(シエナ)

表1 サルコリに関する《アイダ》の記事 (1898年)

2022年7月時点で表1①-⑦の7本の記事をみつけた。サルコリに言及している箇所日本語訳を記し、若干の考察を加える。

### ①『劇場—リンノヴァーティ劇場に関するレビュー—』

「《アイダ》のゲネプロ—昨夜行われた—は、興行全体が、と言うよりはマエストロ・スッリがこの偉大で難しい作品を上演するにあたってかけた準備期間の短さからは誰も予想しなかったような、非常に幸福な成功を収めることとなった。

劇場のどんな狭い空間をも埋め尽くした観衆は、全ての演奏者、特にソプラノのスッリ夫人とサルコリ氏を、この上ない熱狂で喝采し、完全に満足したことを表現した<sup>(3)</sup>”  
“LA VEDETTA SENESE, 1898.1.19, p.2”

ゲネプロの記事である。何人かの出演者のうち、取り上げられた2人の中にサルコリが入っているのが興味深い。

### ②『劇場—リンノヴァーティ劇場に関するレビュー《アイダ》上演初日—』

「27年間の継続した、センセーショナルな大ヒットの後、長年願望が満たされなかった故に、さらに募っていった熱烈な期待の中、とうとう—昨夜—天上の、いやむしろ天国のと言った方がいい作品である、《アイダ》が我々のもとにやって来たのだ! (….) 厳しい試練を幸福な形で乗り越えたのはデビューしたばかりのサルコリ氏であり、熟練の歌い手でも誰もが賞賛を受けられるわけではないような難しい役柄を演じたにもかかわらず、くりかえし観客の喝采を受けた。彼の声にはラダメス役を演じるのに必要なドラマチックな抑揚が欠けているが、それを埋め合わせるような甘い美声、いつでも無理なく出る、安定した華麗な高音、勢いや感情表現の豊かな歌声をもっている<sup>(4)</sup>”  
“LA VEDETTA SENESE, 1898.1.21, p.2”

サルコリがラダメス役であることがわかる。また、デビューしたばかりでありながらも、サルコリが客席の喝采をうけたことや、サルコリの声についても言及されている。サルコリの声は「ドラマチックな抑揚が欠けている」と欠点も指摘されながらも「甘い美声、安定した綺麗な高音、豊かな歌声をもつ」と評されている。

### ③『劇場—リンノヴァーティ劇場における《アイダ》—』

「25年以上前からシエナでは《アイダ》の公演が望まれていた。シーズン毎にこの舞台を実現しようという抱負、計画がたてられ、話がすすめられていたが、その結果は神のみぞ知るところとなっていた。特に、数年前ある興行団が、なにか大きなことを成し遂げようと研究に研究を

重ねた結果、わが街のどの劇場でもまだ《アイダ》が上演されたことがないことに言及したことは記憶に新しい。それからというもの、リッツァ劇場の舞台拡張の話が出たが、話、話ばかりで何も具体的なことにはつながらなかった。

いずれにしても、経済的な理由というのが常に一番の障壁となっていた。

しかし、ここに不死鳥のような劇場支配人として、マエストロ・スッリ・フィラーがその興行団にオーケストラ団やコーラス団も参加させ、さらに、彼の優秀な教え子であるテノールのアドルフォ・サルコリが既にデビューできる状態にあったことも良いきっかけとして、考え、行動し、様々な障害を乗り越えて木曜の夕方にシエナの観客に長年待ちわびていた《アイダ》を披露してくれたのだ。(…) テノールのサルコリは、この新たな成功について大変喜んでるかもしれない。彼のようなデビューしたての新人が、その2つ目の作品で《アイダ》への出演に挑戦し、その困難な課題を音楽的にも、演技的にも幸福な形で乗り越えたということは、彼のこれからのキャリアに大きな期待が出来るであろう<sup>(6)</sup>” *Gazzetta di Siena periodico settimanale*, 1898.1.23, p.2”

この記事でも、サルコリが指揮者スッリの弟子であること、また、十分な力量を持って、デビューを飾っていることが記されている。

#### ④ 『ヴェルディの《アイダ》』

「リンノヴァーティ劇場では《ラ・ジョコンダ》に続き《アイダ》が上演され、秀逸なるマエストロ・スッリの熟練した精力的な指導に導かれた賢明な興行により、威風堂々と演出されたヴェルディの代表作をとうとう拝むことができることに歓喜していた私達の街の観客を完全に虜にする、非常に素晴らしい舞台が実現された。アイダ役のヴィットリア・ペトリッリースッリ夫人は驚くほど役に入りこんでおり、毎夜その功績に見合った賞賛や喝采を受けた。(…) 我々がシエナ市民であるテノールのサルコリはラダメス役に挑戦し、その火の試練を非常に幸福な形で乗り越えたと言ってよいだろう。ロマンツァを非常に上手に朗唱し、第3幕と第4幕において非常に的確な演技をした<sup>(6)</sup>” *Gazzetta Musicale di Milano*, 1898.1.24, p.u.”

「わらがシエナ市民であるテノールのサルコリ」との表記はオペラ《ラ・ジョコンダ》の時にもみられた。サルコリがシエナ市民に、そのデビューを注目されていたことが伝わる。

#### ⑤ 『劇場』

「《アイダ》の上演は、かなり多数の観客をリンノヴァ

ーティ劇場に集め続けている。ついに、シエナ人の良識に賛辞を贈ろう!魔法のようだ!良い舞台がある時にも、シエナ人は喜んで劇場に赴かないと言ったのは誰だったか?

今回は本当に、私達の街の大劇場で上演される舞台は、率直に言って、この地で興行団が受け入れざるを得ない条件を考えると、豪華すぎると言っていい程である。

《アイダ》によって得られた成功は、興行団にとってこれ以上ないという程満足のいくものであったが、収支の中にあらゆる種類の犠牲が含まれていたことを考慮に入ると、出演した優秀な役者にとってもこれ以上ないというほど素晴らしいものとなったのである。

比類なきアイダを演じたペトリッリースッリさんは非常に率直な熱狂を呼び起こし、アラシア嬢はアムネリス役の他の最も優秀な役者と比べても決してひけをとらず、テノールのサルコリは一夜毎により歌声の力強さや演技への自信が増しており、カッタドーリは異論の余地のないアモナスロを演じ、バスのブロンディも素晴らしく、全員が常に最も自発的で、暖かい賞賛的となった。

今夜は公演6日目となるが、全ての要素から、日曜日と同様、素晴らしい舞台を見せてくれるだろうと思われる<sup>(7)</sup>” *Gazzetta di Siena*, 1898.1.30, p.2”

《アイダ》の公演が、非常にうまくいっていることが示されている。また、サルコリについても、順調に回を重ねている様子が見てとれる。

#### ⑥ 『劇場—リンノヴァーティ劇場に関するレビュー—』

「水曜日と木曜日は、それぞれ2人の歌い手に捧げられる夕べとなった。最初の夕べはラムフィスの役柄を特に際立たせることの出来たバスのブロンディに捧げられ、非常に多く集まった観衆は、彼を熱烈に賞賛しその満足を示した。彼には素敵な月桂冠、詩や2つほどの金ボタンが贈られた。

シエナ市の観客は毎夜《アイダ》の公演に大勢で駆けつけており、このヴェルディの偉大なオペラ作品の美しい音楽を特別に楽しんでいることを明白に示しており、また正当に、注意深く役者一人ひとりの価値を評価していることの証拠を示している。実際、疑いなく主役の座を占めているスッリ夫人に対しては、贈られる喝采も絶え間なく、また終わることなく続き、また第3幕のラダメスとのデュエットでは、彼女の、常に正確で、正当で、模範的な歌声の中にこめられる情熱の激しさのために、観客から本当に熱狂的な拍手を受けることになった。(…) サルコリはますます作品に精通した若者として際立ってきており、また素晴らしく、親しみ深い声からその将来が非常に期待される。今夜は《アイダ》公演9日目である。《アイダ》初公演より27周年を迎えるこの8日の火曜日には、至高の

マエストロ・ヴェルディに捧げられる大公演が開催される<sup>(8)</sup>”*Gazzetta di Siena*, 1898.2.6, p.2”

記事中に「今夜は《アイダ》公演9日目」と記され、この後も《アイダ》が公演された記事がみられることから、サルコリは《アイダ》のラダメス役をオペラデビュー2作目にして、10回は演じたことが推測できる。

#### ⑦ 『シエナにて』

「2月20日—《アイダ》の上演がその受けた喝采においても、また興行収入においても大成功を収めた、また現在も収め続けている我がリノヴァーティ劇場では、素晴らしい夕べが2度開催され、その際の観客の質もずば抜けて高く、また数も多かった。

最初の夕べは（…）次の夕べはわれらがシエナ市民であるテノールのアドルフォ・サルコリさんに捧げられる夕べとして開催され、多くの観客が彼に対する高評価や親愛を劇場全体のオベーション、高価な贈り物や彼への献辞で表現し、これも忘れられない一夜となった。どちらの夕べにおいても、すばらしいアムネリスを演じたアラシア嬢、最高のアノマスロ役のひとりであるバリトンのカッターリや2人のバス、ブロンディとペドラッツィに対しても、その功績にふさわしい拍手喝采が贈られた<sup>(9)</sup>”*Gazzetta Musicale di Milano*, 1898.2.12, p.u.”

本項では、歌劇《アイダ》に関する、サルコリに言及した7本の記事を並べた。記事から、サルコリにとってのデビュー2作目となる歌劇《アイダ》はサルコリの生まれ故郷であるシエナで多くの市民から高評を得ていることが伝わる。10回以上の《アイダ》公演を通して、ラダメス役が着実にサルコリのレパートリーとなったこと、また「ますます作品に精通した若者として際立ってきており、また素晴らしく、親しみ深い声からその将来が非常に期待される<sup>(8)</sup>」テノール歌手であったことがわかる。

## 4 まとめ

サルコリのデビューに関する記事の調査により、サルコリは、1897年、30歳の時に、恩師ジョルジョ・スツリ指揮のもと、生まれ故郷のシエナで、歌劇《ラ・ジョコンダ》のエンツォ役を複数回演じオペラデビューを果たした。そして、そのすぐ後に、2作目となる歌劇《アイダ》のラダメス役を10回以上演じていたことがわかった。

当時の新聞には、サルコリに言及するオペラの批評が複数回掲載されていた。批評には「ドラマチックな抑揚が欠けている<sup>(4)</sup>」と欠点も指摘されながらも、「それを埋め合わせるような甘い美声、いつでも無理なく出る、安定した華麗な高音、勢いや感情表現の豊かな歌声をもっている<sup>(4)</sup>」

と評され、観客の評価も非常に好意的なものであったことがつづられていた。また、「デビューしたての新人が、その2つ目の作品で《アイダ》への出演に挑戦し、その困難な課題を音楽的にも、演技的にも幸福な形で乗り越えたということは、彼のこれからのキャリアに大きな期待が出来るであろう<sup>(5)</sup>」や「サルコリはますます作品に精通した若者として際立ってきており、また素晴らしく、親しみ深い声からその将来が非常に期待される<sup>(8)</sup>」などの言葉からは、「我がシエナ市民であるテノールのサルコリ<sup>(1)(6)</sup>」は大成功をもってデビューを果たし、サルコリの生まれ故郷であるシエナ市民から、オペラ歌手としての将来を期待されていたことが伝わる。

サルコリは、オペラのシーズンを通してイタリア・オペラの難しい役を歌いきるだけの力を持ち、シエナ市民を熱狂させるだけの技量を持ち合わせたテノール歌手であったといえよう。

## 4 今後の課題

明治初期の日本では、外国人が多く居住していた横浜居留地を中心に、大小さまざまなオペラやオペレッタの団体が来日していた。

一方、日本人を中心としたオペラが上演されるのはまだ先のことで、最初のオペラ公演といわれているのは、東京音楽大学で明治36年7月23日に上演されたグルック(Christoph Willibald von Gluck: 1714-1787)の歌劇《オルフェウス(オルフェオ)》である。《オルフェウス》は、帝国大学ドイツ語文学専攻の石黒小三郎が中心となり、訳詞作業が行われ、ピアノ伴奏のみの上演であった。エウリディーチェは百合姫とされ、柴田環(三浦環)が演じたが、文部省からは「風俗嬢実害がある。男女学生が合同して、夜間、恋愛の劇を上演するのは望ましくない」とされた<sup>(10)</sup>(嶺隆 1996: 242-244)。

東京音楽学校で《オルフェウス》が初演されたものの、その後のオペラ上演に関しては「《オルフェウス》上演後、例えば《ローエングリン》をやろうという声もあったのだが、いろいろの創作の試みがかなり活発だったのにもかかわらず、名作オペラ上演の動きは非常に僅かで、特にイタリア・オペラは全く未知のままで残された<sup>(11)</sup>」との言葉通り、オペラ待望論はあったものの、本格的なオペラ上演はなかなか実行されない状況が続く(増井啓二 1984: 99)。また、《オルフェウス》のきっかけはワーグナーブームであり、イタリア・オペラはさらに遠い存在であったようである。

本研究では、サルコリのデビュー記事に着目し、サルコリのオペラ歌手としての技量の一端を明らかにした。今後、サルコリが来日までにイタリアでどのようなオペラの

キャリアを積んでいたのかを引き続き調査する。そして、「イタリア・オペラは全く未知のままで残された<sup>(11)</sup>」日本で「イタリア系」として音楽活動をつづけた、イタリア人テノール歌手、サルコリの日本音楽界への影響を考察し

たい。

[本研究は、文部科学省より科学研究費：基盤研究（C）（21K00238）の助成を受けたものである。]

---

## 引用・参考文献

- |  |  |
|--|--|
| <p>(1) “La Gioconda di Ponchielli ai Rinnovati” <i>Gazzetta Musicale di Milano</i>, 1897.12.26, p.u.</p> <p>(2) “TEATRI” ‘Ai Rinnovati’ <i>Gazzetta di Siena periodico settimanale</i>, 1898.1.3, p.3</p> <p>(3) “TEATRI” <i>LA VEDETTA SENESE</i>, 1898.1.19, p.2</p> <p>(4) “TEATRI” <i>LA VEDETTA SENESE</i>, 1898.1.21, p.2</p> <p>(5) “TEATRI” <i>Gazzetta di Siena periodico settimanale</i>, 1898.1.23, p.2</p> | <p>(6) “Aida di Verdi” <i>Gazzetta Musicale di Milano</i>, 1898.1.24, p.u.</p> <p>(7) “TEATRI” <i>Gazzetta di Siena</i>, 1898.1.30, p.2</p> <p>(8) “TEATRI” <i>Gazzetta di Siena</i>, 1898.2.6, p.2</p> <p>(9) “SIENA” <i>Gazzetta Musicale di Milano</i>, 1898.2.12, p.u.</p> <p>(10) 嶺隆 1996『帝国劇場開幕』（中公新書）。242-244頁。</p> <p>(11) 増井啓二 1984『日本のオペラ』（民音音楽資料館）。99頁。</p> |
|--|--|